

白神の生態 総合調査

世界遺産登録以来30年ぶり

植物、昆虫、キノコ…

今年12月、白神山地が世界自然遺産登録30周年を迎えるのを機に、弘前大学農学生命科学部付属白神自然環境研究センター(センター長・中村剛之教授)は、4月から約1年間、白神山地の植物や昆虫、キノコ類などの生態に関するデータを集める総合的な調査を始める。民間の研究者や愛好家、市民ボランティアら地元を中心に総勢40人以上が協力。現状の自然環境を記録し、生態系などの保護に向けた研究に役立てる。「【「自然環境刻々と変化」26面】」

同センターによると、白神山地の自然調査は、約30年前に県や環境庁(当時)が主体となり組織的に行われた。その後は弘大などが各分野で調査を進めたが、全体を網羅する形での調査は行われていなかった。今回の調査について、中村教授(昆虫分類学)は30年前から白神の自然は明らかに変わったが、しっかりとモニタリングできなかったのは正々しい。現在の白神を記録することによって、10年、20年後の変化を検証できる」と意義を語る。

白神山地は、鯉ヶ沢町と深浦町の間にあり、約13万坪の頂点に約1割に当たる中心部約1万7千坪が「世界遺産地域」となっている。広大な白神の森全域を限られた人数で調査するのは難しいため、今回は鯉ヶ沢町黒森の「白神の森 遊山道」の約52坪のエリアを「重点調査地」に選んだ。遊山道は「ミニ白神」とも呼ばれていた場所。遺産地域の外にあるが、白神の核心部と同じような森林景観があり、全体像を見極める重要な材料となるのに加え、通行止めなどによって調査が

弘大・研究センター 来月から

中断する恐れも少ない。遊山道のほか、特徴的な地形や貴重な生態系がある十二湖やくまの滝周辺でもデータを収集し、リスト化する方針。調査に協力するのは白神山

地ビジターセンター、津軽植物の会、津軽昆虫同好会、白神キノコの会、県立郷土館など有志。ただ、高齢のメンバーが多く、「大規模に調査できるのはこれが最後になるか

もしれない」と中村教授。「将来にわたって観察を続けていくために、(今回の調査を通じて)若い人材を掘り起こしていくことも重要」と指摘した。6月には、子どもたちが調査に参加できるイベントを企画している。調査は年内に終了。2023年度中に結果を取りまとめる方針。(高松拓輝)



4月から白神山地を調査する中村教授(左から2人目)ら、山岸洋真准教授(左から3人目)ら白神自然環境研究センターのメンバー

上記の画像は、当該ページに限って”東奥日報”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。